バルトリハリの因果関係否定論

李 宰 炯

0. バルトリハリ (Bhartṛhari 以下 Bh) は VP III, Sambandhasamuddeśa 第 66 詩節から第 81 詩節までの箇所において、存在と非存在についての形而上学的議論を展開し、それを通じて現象世界の展開を説明する理論としての因果論を否定し、仮現論 (vivartavāda) を定説として導出しようとしている。その結論ともいえるべき VP3.3.81 において、Bh は事象 y が結果—原因が働きかける対象—として生じる以前には事象 x は原因として作用し得ないにも関わらず、特定の原因があるとき特定の結果が起こると我々が経験するのは、驚くべき作用 (atyadbhutaṁ vṛttiḥ) によることであると述べる。VP3.3.81 は次の通りである。

atyadbhutaṁ tv iyaṁ vṛttir yad abhāgaṁ yad akramam /

bhāvanāṁ prāgabhūtānām ātmatattvaṁ prakāśate //

この詩節は、従来注釈者ヘーラーラージャ (Helārāja 以下 Hel) の解釈に基づいて理解されてきた。この詩節に対して Hel は ‘ātmatattva’ を結果それ自体を、そして ‘prakāśate’ を知覚される (dṛśyate) ことを意味する表現として理解した上で、atyadbhutaṁ vṛttiḥ を〈仮現〉自体或は〈仮現〉を引き起こす原動力である無明能力 (āvidyāśakti) と見る二つの解釈を提示している。しかし、Bh の仮現説の基本構造や VP3.3.81 が置かれた前後の文脈に照らして見たとき、果たして ātmatattvaṁ prakāśate を結果それ自体が知覚されることと理解することが妥当かどうか疑問を感じざるを得ない。本論者は ‘ātmatattva’ に対する Hel の解釈の問題点を指摘し、ātmatattva とは何かを考察することを通じて VP3.3.81 に述べられている因果関係に代置される〈仮現〉を正しく理解しようとするものである。

1.1. 第一解釈において、Hel は驚くべき作用を「特定の原因があるとき、以前には存在しなかった結果がたちどころに顕われる」こと、すなわち〈仮現〉それ自体であると説明する。これによれば、VP3.3.81 は次のように読むことができる。

「以前には存在しなかった諸々のもの、[すなわち結果] それ自体 (ātmatattva) は、[生じる以前の状態と減した後の状態という] 部分を持たず、順序 [も] 持たない。しかし、

[そのような結果それ自体が特定の原因があるとき] 顕われる (prakāśate) [すなわち知覚される], というこの [「仮現」と呼ばれる] 作用は非常に驚くべきものである」

一方、第二解釈は VP3.3.81 の二つの ‘yad’ の中の一つを ‘yatra’ の意味で解釈し、驚くべき作用を〈仮現〉それ自体ではなく、それがあるとき〈仮現〉が起ることの無明能力の作用として解釈している点で第一解釈と内容を異にするが、二つの解釈に本質的違いはない。どちらの解釈においても、Hel は VP3.3.81 の ‘ātmatattva’ を結果それ自体を意味する表現として理解した上で、無明能力の働き或はそれによる〈仮現〉といった驚くべき作用を通じて「結果それ自体」が「知覚される」と説明している。

1.2. VP3.3.81 に対する以上のような理解を踏まえた上で、Hel は VP3.3.82 を注釈しながら、「順序」などの言語表現は、中間状態すなわち生じてから滅するまでの状態においてのみ知覚されるものに依拠して、その前・後の状態すなわち生じる以前と滅した後の状態を構想することを通じて成立すると述べる。しかし、Bh が *Vṛtti ad VP1.1* で「[ブラフマンが] 言葉の対象¹⁾として多様に顕われる」という VP1.1c 句を注釈しながら〈仮現〉の定義を提示していること²⁾を考えると、〈仮現〉或は〈仮現〉を起こす無明能力の働きによる結果の顕現を結果が知覚の対象として顕われることと理解し、知覚の対象としての結果の顕現を構想によって生み出された言語表現の対象と区別する Hel の解釈は受け入れがたい。さらに、Bh は *Vṛtti ad VP1.1* において伝承 (āgama) を引用し、〈仮現〉には物体としての〈仮現〉と行為としての〈仮現〉の二種類があって、その二つは無明能力の働きに他ならないと述べている。VP3.8.1 における行為の定義によれば、順序という相を持つものが行為と呼ばれる。このことを考えると、無明能力の働き或は〈仮現〉によって、順序を持たない結果それ自体が「たちどころに」、すなわち順序なしに知覚される、という Hel の説明は Bh の仮現説の基本構造と一致しないと言わざるを得ない。

2.1. 次には、VP と *Vṛtti* における ‘ātmatattva’ という表現の用例を検討して見よう。Bh の表示理論によれば、事象 x は他者との関係を通じて限定的添性 y を持つものとして認識されて言語表現される。VP と *Vṛtti* において ‘ātmatattva’ はそのような事象 x が持つ、限定的添性とは異なる、他者と関係を結ぶ以前からその事象に存在する本質を表現するときに使われる³⁾。例えば、Bh は VP1.76 とそれに対する *Vṛtti* で恒常性という ātmatattva を持つスポータ (sphoṭa) はそれ自体としては持続時間の区別を持たないものであるが、持続時間の区別を持つ音声 (dhvani) と

の関係を通じてのみ認識されるから、スポーツは音声の持続時間の区別をあたかも自分の属性として持つものであるかのように、すなわち持続時間の区別を限定的添性とするものとして認識されると述べる。このように事象 x が限定的添性 y を持つものとして認識されて表現される場合でも、その $\text{\textit{ātmātattva}}$ が失われることはない (*Vṛtti ad VP2.24*)。しかし、日常的な認識や言語活動はすべて他者を限定的添性として持つ事象を対象とするから、事象 x の $\text{\textit{ātmātattva}}$ は、他者すなわち他の事象の $\text{\textit{ātmātattva}}$ と関係を結ぶことを通じてのみ、間接的に認識されて表現される。それはそれ自体では決して認識されない (*VP3.1.21, VP3.9.7*)。

2.2. それでは、*VP3.3.81* における ' $\text{\textit{ātmātattva}}$ ' は具体的に何を表示しているのか。答えを見つけるために、*VP3.3.81* の前後の詩節の内容を少し検討して見よう。*VP3.3.66* で Bh は非存在を如何なる相も持たないものと看做した上で存在と非存在の二元性を否定する。非存在は実在性を持たない非実在である (*VP3.3.77*)。存在は非存在を、そして非存在は存在を自分の限定的添性とすることを通じて理解され、言語表現される (*VP3.3.60*)。しかし、非存在は順序とか非順序 (=同時) などの相を持たないものであるから、存在も本質的には順序とか非順序という相をもたない (*VP3.3.67-8*)。事象 x の $\text{\textit{ātmātattva}}$ はその事象自身に基づいても、他者に基づいても獲得されたり、失われたりするもの、すなわち生じたり、滅したりするものではない (*VP3.3.70*)。恒常で単一な実在、すなわちブラフマンは、言語活動の対象となるために、それ自体の多様な能力を通じて存在・非存在を本質とする多様な相を持つものとして顕われる (*prakāśate*) (*VP3.3.87*)。

これらの詩節の内容から、我々は *VP3.3.81* で述べられている $\text{\textit{ātmātattva}}$ は、順序を持って生じて滅する諸々の事象のそれ自身の本質であり、それ自体は決して順序を持って生・滅などの行為をすることがないものであり、他者である非存在が非実在であることから、真実には如何なる相とも結び付けられないものである、唯一実在として認められる存在—ブラフマンそのもの—であると結論付けることができる。諸事象は順序を伴って生じて滅する。しかし、諸事象の $\text{\textit{ātmātattva}}$ であるところの唯一の実在としての存在は決して順序などの相を持たず、生起・消滅などの過程を経ない。それはただ驚くべき作用を通じて、我々の認識に順序を持って生じて滅するものとして、そのような限定的添性を持つものとして顕われるだけである。そして唯一の実在は存在のみであるから、Bh が *VP3.3.83* で述べているように、その驚くべき作用は、他ならぬ存在そのものが持つ作用、すなわち能力であると考えられる。そして、*VP1.3* と *VP3.1.36* で Bh が有性 (*sattā*) すな

わち唯一の実在としての存在は時間能力を通じて生起するものなどの変様体として順に顕われると述べていることから、我々はその能力を時間能力であると判断することができる。 *Vṛtti ad VP1.3* で述べられているように、時間能力を通じて変様体として顕われるとき、有性は必ず時間以外の原因に依拠するものとして顕われる⁴⁾。

3. Bh は *VP3.3.66-80* において非存在の実在性を否定し、存在と非存在の二元性を構想に基づくものであると述べる。非存在の非実在性に基づいて因果関係の実在性を否定した後、彼は *VP3.3.81* で因果関係とは諸々の事象の *ātmataṭṭva*、すなわち単一な真実在であるブラフマンの〈仮現〉による現象に過ぎないと結論付ける。そしてその〈仮現〉とは、ブラフマンがそれ自体の時間能力を通じて順序を持って生じて滅するもの、原因に依拠するもの（＝結果）として多様に顕われることである。‘*ātmataṭṭva*’を Hel のように結果それ自体を意味する表現ではなく、結果としての事象が持つ本質、すなわち結果という相とは異なる、真実在としてのブラフマンを意味する言葉として理解するとき、我々は Bh の仮現説の基本構造や ‘*ātmataṭṭva*’ の用例と整合する *VP3.3.81* の解釈を提示することができる。そしてそのときこそ、Bh によって因果関係に代置される〈仮現〉は正しく理解できると筆者は考える。最後に今までの考察に基づく *VP3.3.81* の訳を以下に提示する。

「以前には存在しなかった諸々の事象〔すなわち結果としての事象〕のそれ自身の本質（*ātmataṭṭva*）〔である唯一の真実在ブラフマン〕は部分を持たず、順序〔も〕持たないものである。しかし、〔そのような〕事象のそれ自身の本質は、ある作用が存在するとき〔部分を持ち、順序を持つものとして〕顕われる（*prakāśate*）。その、〔時間と呼ばれるブラフマンの〕作用〔すなわち能力〕は、非常に驚くべきものである」

略号 *VP* = *Vākyapadīya*: W. Rau, ed. Wiesbaden 1977. *Vṛtti* = *Vṛtti ad Vākyapadīya*: S. Iyer, ed. Poona 1966. *Pad* = *Paddhati on Vṛtti ad Vākyapadīya*: See *Vṛtti*

1) *Vṛṣabhadeva* は *VP1.1* の c 句 ‘*arthabhāvena vivartate*’ の *artha* が言葉の表示対象であることを明言している。 *Pad* 8.12-3. 2) *Vṛtti* 8.3-9.1. 3) See *Vṛtti ad VP1.76*, *Vṛtti ad VP1.104*, *Vṛtti ad VP2.23-4*, *Vṛtti ad VP2.32*, *Vṛtti ad VP2.298-99*, *VP3.1.21*, *VP3.9.36*, etc. 4) *VP1.1-2*.

〈キーワード〉 バルトリハリ, *Vākyapadīya*, *vivarta*, 因果関係, *ātmataṭṭva*

(広島大学大学院)

determining its object wrongly. In order to account for the sublation of erroneous cognitions, Kumāṛila brought together the theory in question and the theory of sublation (*bādhā*). Within the framework of the theory of the intrinsic validity of knowledge, the theory of sublation claims that when two cognitions, previous and subsequent, provide inconsistent information about the same object, the previous cognition is determined to be false by the subsequent.

Anything in this world appears to a cognizer as something determined and what appears to a cognizer is simply what really exists in the external world — this is the belief of the realist Kumāṛila.

61. Bhartṛhari's Negation of Causality

Yi Jae-hyung

We experience that when a cause is present, its effect, which did not exist before, arises. In *Vākyapadīya* (VP) 3.3.81 Bhartṛhari says that this experience is owing to a marvelous function (*atyadbhutā vṛttiḥ*); for, according to his analysis, it would have to be accepted that the cause cannot perform any activity toward the effect before the effect arises. VP 3.3.81 goes as follows:

atyadbhutā tv iyaṃ vṛttir yad abhāgam yad akramam |
bhāvānām prāgabūtānām ātmātattvaṃ prakāśate ||

This important *kārikā*, by which Bhartṛhari intends to imply that the relation of cause and effect is established only on the basis of *vivarta*, has been understood on the interpretation of Helārāja. According to him, the expression ‘*ātmātattva*’ refers to an effect and what is called *atyadbhutā vṛttiḥ* is either *vivarta* or the power of Nescience (*avidyāśakti*) which brings about *vivarta*. In view of Bhartṛhari’s *vivarta* theory and the context in which VP 3.3.81 is located, however, it is open to question whether ‘*ātmātattva*’ can refer to an effect.

In the present paper, I have pointed out the problems involved in Helārāja’s interpretation of the expression ‘*ātmātattva*’, in order to show that what ‘*ātmātattva*’ refers to is Brahman, the essence of all phenomena in this world, and that what is called *atyadbhutā vṛttiḥ* is just the power of Time (*kālaśakti*). The interpretation I have suggested is as follows:

“Marvelous is this function (*vr̥ttih*), [i.e., the power of Time,] by virtue of which the essence of previously non-existent things (*bhāvānām prāgabhūtānām āmatatvam*), [i.e., Brahman,] which is indivisible and sequenceless, manifests itself (*prakāśate*) [as something which is divisible and occurs in a sequence].”

62. On the usage of *avidyā* by Śaṅkara: *avidyā-kāma-karman*

KATŌ Tatsuoki

In this article I want to deal with the usage of *avidyā* by Śaṅkara with a view to doing comparative research. Concretely speaking, I would like to look at similar usages of the compound *avidyā-kāma-karman* which are discovered in Śaṅkara's works, in order to study the problem of authorship.

63. The Sumedhakathā in the *Mahābodhivaṃsa*: An Introductory Study of the Pāli Chronicle Literature in Medieval Sri Lanka

MATSUMURA Junko

In this paper, the author looks at the *Mahābodhivaṃsa*, whose Roman script edition was published at the end of the 19th century by the PTS. However, so far no modern language translation has been published, nor has any significant research been done. This author examines the generally accepted dates and authorship of the work, and shows that there is no hard evidence for them. Furthermore, a list of material on the text in the Sinhalese language little known outside Sri Lanka is given. The author takes as an example the Sumedhakathā told at the beginning of the text, and compares it with the same story in other Pāli texts, thereby demonstrating the originality and importance of the *Mahābodhivaṃsa* in the history of Pāli literature.

64. Recent Studies in the Pāli Commentaries

MORI Sodō

Since my dissertation entitled *A Study of the Pāli Commentaries: Theravādic Aspects of the Aṭṭhakathās* (in Japanese, Tokyo: Sankibō), the first major work in this field of research, was published in 1984, Japanese studies in the